

学 位 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

1. 申請者氏名	吉田 智子
2. 審査委員	主 査：（兵庫教育大学教授） 岡本 希 副主査：（岡山大学教授） 伊藤 武彦 委 員：（岡山大学教授） 松枝 睦美 委 員：（岡山大学特任教授） 鈴木 久雄 委 員：（兵庫教育大学教授） 筒井 茂喜
3. 論文題目	学校における心肺蘇生教育を教員主導で継続的に実施できる方法に関する研究
4. 審査結果の要旨	教科教育実践学専攻 生活・健康系教育連合講座 吉田智子から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。 論文審査日時：令和6年2月8日（木） 18時30分～20時00分 場 所：オンライン（各研究室等） 1. 学位論文の構成と概要 本研究は、学校におけるバイスタンダー育成のための心肺蘇生法（以下、CPR）教育を教員が中心となり継続的に実施する方法について検討したものである。 第1章（序論）では、学校における救急対応の現状と課題をまとめた。ほぼすべての学校にAEDが設置されているが、児童生徒が死亡する事案が発生している。学校におけるバイスタンダー育成のためのCPR教育が必要であるが、CPRの指導にあたる教員の経験不足、CPRトレーニング用機材の不足などが学校でのCPR教育の障壁となっていることを論じた。 第2章では、大阪府内の国立、私立、公立の小・中・高校の養護教諭を対象にCPR教育への意識を質問紙で調査した。養護教諭歴9年以下と10年以上の2群に分けて比較した。10年以上の養護教諭に比べ、9年以下の養護教諭は救急対応に自信がない者およびCPR教育に困難を感じる者の割合が高く、研修会への参加を希望している者の割合が高いことが判明した。養護教諭の経験年数の違いにより、CPR教育への意識に差があることが明らかになった。本調査により、養護教諭が自信をもってCPR教育に携わるためには、キャリアステージに沿った研修が重要であることが示唆された。 第3章では、大阪府内にある消防機関で普通救命講習会を開催している消防本部、消防局、消防署、消防分署を対象に各種講習会の開催状況や学校との連携について質問紙にて調査を実施した。消防機関側から捉えた学校と消防機関の連携に関する課題について検討した。調査結果から、学校と消防機関が連携することの重要性を認識し連携を取っているものの、最近の救急需要の多さから学校への出向が困難となっており、講習会開催に伴う時間や人手が不足している消防機関の現状を確認した。学校におけるCPR教育は応急手当普及員資格を取得している教員に実施し

てほしいと消防機関が期待していることが示唆された。

第4章では、学校で教員がCPR教育を実施するためには教員の負担が少ないプログラムが重要であると考えた。本研究では、運動部に所属している高校生を対象に、学校で教員が主導となって展開できる短時間の救命講習会の方法と自己再トレーニングの効果を検討した。対象者は運動部所属の高校生183名で研究デザインはランダム化比較試験とした。救命講習会前後でCPRの知識・技術、救命する自信を評価した。ベースラインから1.5か月後に介入群のみ自己再トレーニング（1分間振り返り学習）を実施した。介入の効果を検証するため、ベースラインから3か月後に介入群と統制群の両群にCPRの評価テストを実施した。介入群と統制群全員対象の救命講習会によって、CPRの知識・技術、救命する自信の向上がみられた。適切なリズムかつ正確な深さを伴う胸骨圧迫は、介入群でより多く出来たが、自己再トレーニングの効果はなかった。

第5章の総合考察では、第2章～第3章の調査結果を踏まえた提言を論じた。養護教諭のCPR教育への意識を検討するためには、キャリアステージを十分考慮する必要があるがあった。キャリアステージには教職に就く前の準備段階も含まれるため、教員志望の学生を対象にCPR教育について調査する必要性が示された。養護教諭の職務に救急処置がある以上、CPRスキルを維持していく必要があるため、採用時に簡易トレーニング用機材の購入もしくは贈呈を視野に入れた新たな取り組みを提案した。第3章の結果から学校と消防機関の連携に関する全国的な実態調査が十分になされていない現状にあるため、今後解明することが求められている。第4章で実施したCPRトレーニングにおいて簡易トレーニング機材を使用した、機材によるCPRスキルの影響について検討する余地がある。児童生徒に対する教科としてのCPR教育は日本蘇生協議会（Japan Resuscitation Council：JRC）のガイドラインに準じた内容であるが、バイスタンダー育成を目的としたCPR教育のスタート時期に関しては今後さらなる検討が必要である。

2. 審査経過

本研究の独創性は、CPR教育に関わる現状の課題を養護教諭および消防機関の視点で明らかにしている点である。また、高校生を対象に救命講習会と自己再トレーニングの効果を検証した実証研究を行っている。学位論文の第1章で学校における心肺蘇生教育に関わることができる人材が不十分であることを指摘し、学校における救急対応の現状と課題を明らかにした点が評価された。大阪府内の養護教諭を対象にしたアンケート調査（第2章）から養護教諭の経験年数が浅い場合にCPR教育の自信をつけるためにはキャリアステージに沿った研修会受講が必要であることを明らかにした点が評価された。大阪府内の消防機関を対象にしたアンケート調査（第3章）では、返答数は少なかったものの、消防機関から学校教員にCPR教育により関わることを期待していることを明らかにした点が評価された。第4章では、高校生対象に養護教諭が救命講習会を行い、CPRの知識・技術、救命する自信の向上がみられることを確認した。本研究で採用した短時間構成の救急講習会は養護教諭および生徒の時間的な負担が少なく、学校教育現場で今後も活用できる点が評価された。以上により、これらの研究結果は学校教育への実践への貢献が大きいと評価された。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は吉田智子の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。